日本医学会連合 第４回社会医学若手フォーラムのご案内

2022 年 3 月 4 日（金）17 時 30 分より、第 4 回社会医学若手フォーラムを Web 開催します。がんは、早期発見や治療の進歩に伴い、生存率は改善傾向にあります。その結果として、治療と就労の両立という課題が社会の中で広く認識されるようになりました。他方、早期の発見と治療が重要であるにもかかわらず、コロナ禍で顕在化したように受診の遅れの問題もあります。今回は遠藤源樹先生（順天堂大学）にがんと就労について、大城真理子先生（沖縄県立看護大学）に乳がん受診の遅れについて、実例を交えながら最新の知見をお話しいただきます。演者・発表内容の詳細は本ページ下部をご参照ください。
本フォーラムは参加無料です。
参加登録フォーム https://forms.gle/5gnMSzC5jSKXaoGh6 よりお申込みください。

○開催趣旨

今、日本では人々の命と健康に関わる課題に応じて様々な研究が立ち上がっていますが、社会医学を網羅する形で、分野横断的にそれらを結び、新たな研究につなげる場がなかなかありませんでした。そこで、日本医学会連合社会部会で開催された若手リトリート 2019 からの派生企画として、社会医学若手フォーラムを定期的に開催し、人をつなぐ場を設けてきております。普段、聞けないような話を気軽に聞いて、参加者同士で交流し、アイディアの種をもらったり、育てたりできる場になることを期待しております。

第 4 回社会医学若手フォーラムは、3 月 4 日（金曜）に 2 時間ほど、オンラインでへき地医療、衛生動物学の研究者による研究紹介、座談会、そして参加者交流を行う予定です。

若手研究者のみでなく、学生の方、シニア研究者の方も、ご関心のある方は歓迎しますので、ぜひご参加ください。多くの方々のご参加をお待ちしております。

参加申し込み方法等は、下記ご参照ください。

日本医学会連合社会医学若手フォーラム世話人一同

○開催概要

日本医学会連合第 4 回社会医学若手フォーラム

日時	2022 年 3 月 4 日（金）17:30～19:30
場所	オンライン（Zoom）
対象	社会医学若手フォーラムの趣旨に賛同する研究者
内容	登壇者 2 名による自己紹介・研究紹介・質疑および座談会 ・登壇者（敬称略、五十音順） １）　遠藤　源樹（日本産業衛生学会・日本疫学会・日本職業・災害医学会、順天堂大学） 演題名　Cancer and Work～誰でもその人なりに働ける社会のために～

	２）　　大城　真理子（日本健康学会、沖縄県立看護大学） 演題名　乳房の異常に気づきつつも医療機関の受診が遅れるのはなぜだろう？
参加費	無料
申込方法	事前登録制：下記フォームより、お申込みください。 参加登録フォーム https://forms.gle/5gnMSzC5jSKXaoGh6
申込期限	３月１日（火）
問合先	山本琢磨（兵庫医科大学法医学教室） shakai.wakate@gmail.com
主催	日本医学会連合　第４回社会医学若手フォーラム

タイムテーブル（予定）：

17:30	開会挨拶・趣旨説明
17:40	演者１　遠藤　源樹（発表 20 分）
18:00	演者２　大城　真理子（発表 20 分）
18:20	全体質疑・小括
18:40	ルーム別の交流、アンケート、解散

※講演終了後、全体質疑（20 分）、少人数のグループ交流（50 分）を行い、随時閉会の予定です。

演者詳細

演者１　遠藤　源樹

所属　順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座　准教授

主な所属学会　日本産業衛生学会、日本がんサポーティブケア学会、日本健康教育学会日本公衆衛生学会、日本疫学会、日本職業・災害医学会等

略歴

【学歴・職歴】 福井県大野市出身、2003 年　産業医科大学医学部卒業。2005 年 JR 東京総合病院臨床研修修了後、こころとからだの元氣プラザ常勤医。2008 年 NTT 東日本専属産業医。2014 年東京女子医科大学衛生学公衆衛生学第二講座　助教。
2017 年から現職（順天堂大学大学院医学研究科公衆衛生学講座准教授）。
人事院健康専門委員、公益財団法人がん集学財団社会貢献委員、日本医療機能評価機 Minds 委員、東京都がん対策推進協議会専門委員等を兼任している。

2016 年から 2020 年まで総額 1 億 6092 万円の競争的外部資金を獲得し尽力（厚生労科研「がんと就労」代表、文科科研「心血管と就労」「不妊治療と就労」「統合失調症と就労」代表等、「医師の働き方改革」、「ストレスチェック中国語版・ミャンマー語版・ポルトガル語版」開発、「フリーランス労働者の健康支援」等）。 武見奨励賞・日本産業衛生学会奨励賞（2021 年）、日本医師会・医学研究奨励賞（2019 年）、土屋健三郎記念・産業医学推進賞（2018 年等を受賞。
著書に、『治療と就労の両立支援ガイダンス（単著・労政時報）』『がん治療と就労の両立支援ガイド（単著・日本法令等）』などがある。

演題名　Cancer and Work～誰でもその人なりに働ける社会のために～

発表要旨
日本の新規のがん患者は年間約 100 万人超であるが、その約 3 分の 1 にあたる約 30 万人が就労世代のがん患者で、就労世代のがん対策の重要性が増しており、現代は「がんと共に生きる」、いわゆる、がんサバイバーシップの時代です。その要因として、①シニアの就労人口増加による、がん罹患労働者の増加、②女性の就労割合の増加による、女性のがん罹患労働者の増加、③乳がん等の罹患率の増加による、がん罹患労働者の増加：年々増加傾向にある就労世代の乳がん等、④がん医療の進歩による、就労継続可能ながん患者の増加などが挙げられます。がん教育、がん検診、がん治療と就労・就学の両立支援についてお話ししたいと思います。

演者 2　大城真理子

所属　沖縄県立看護大学

主な所属学会　日本健康学会　日本看護科学学会

2004 年　沖縄県立看護大学看護学部看護学科卒業
2006 年　琉球大学大学院保健学研究科修士課程（保健学）修了
2006～2012 年　雪ノ聖母会聖マリア病院、琉球大学病院　看護師
2017 年　沖縄県立看護大学大学院博士後期課程（看護学）修了
2019 年　Eötvös Loránd University（ハンガリー）
修士課程（Health Care Policy, Planning and Financing）修了
2019 年～沖縄県立看護大学　成人保健看護領域　助教

演題名　乳房の異常に気づきつつも医療機関の受診が遅れるのはなぜだろう？

発表要旨

乳がん患者が乳房の異常に気づきつつも受診が遅れてしまう背景を明らかにする研究に取り組んでいる。乳がんは早期に発見され、治療効果が得られる場合、長期生存が見込まれるが、乳がん患者の約 3 割は乳房の異常に気づきつつも、医療機関を受診するまでに 3 か月以上の時間を要している。乳房の異常に気づいてから 3 か月以上の受診の遅延は生命予後に影響する。また、患者が受診するまでに抱える問題は、治療開始後のプロセスにも影響することから（例：治療中断など）、治療開始後の看護援助を行う上でも、本テーマに焦点を当てた研究を実施することは意義があると考えている。

これまで、諸外国を中心に、乳がん患者の受診の遅れの関連要因について検討されてきたが、受診行動はその国の社会文化や医療資源の状況にも影響を受けることから、日本の社会文化を考慮した“遅れ”に関連する要因を明らかにしていくことが重要である。

演者は、これまで 300 人ほどの乳がん患者に、直接話を伺いながら、受診が遅くなった者とすぐに受診した者を比較した量的研究、質的研究を実施してきた。その中で、乳がんかもしれないと疑いつつも、病院に行きたくても行けない程、時間的にも経済的にも困難な生活状況に置かれていることや、身の回りに頼れる人がおらず生きる希望がないこと、周りの人や状況を優先してしまい自分のことは後回しになってしまった女性の実情が明らかになった。

また、調査を進める中で、沖縄本島と離島に居住する乳がん患者とでは、受診が遅れてしまう背景が異なる可能性が示された。特に、離島に居住する乳がん患者は、島に専門医が不在のため、直接、沖縄本島に出向く必要があることや、情報や相談の場が乏しい環境に置かれている。よって、現在は離島に居住する乳がん患者に焦点を当てた受診行動の研究に取り組んでいる。